翻訳の思考

チャンドラー『長いお別れ』を例に

山形浩生

ぼくが

何を考えながら

訳しているのか

を明かそう——

『21世紀の資本』など訳書200冊以上、訳者解説にも定評ある

翻訳界の異才が翻訳の極意を完全公開！

翻訳の思考

チャンドラー『長いお別れ』を例に

山形浩生

星海社

402

SEIKAISHA SHINSHO

まえがき

二〇二五年春に出した『翻訳者の全技術』はそこそこ好評なようで、ありがたい限り。が、よく聞かれた不満は「翻訳の話だと思ったら、全体の2割くらいしかないじゃん！」というもの。たいがいはそれでもおもしろがってくれたし、またあそこに書いたことがどれも翻訳に関わる話でもある、というのをわかってくれた人もいる。が、そうだね、純粋に翻訳話を期待した人もそれなりにいるのかもしれない。

よろしい。では、本書でそれを提供しようではないの。

とは言っても、具体的に何を提示したら良いだろう。辞書はこれを使いますといった話をしても仕方ないだろう。いまから買うなら物書堂（ものかきどう）さんの辞書アプリで、研究社の新英和・新和英大辞典や大辞林その他を使えばほぼ基本の用は足りるだろう。ぼくは昔からＥＰＷＩＮＧ版でどちらも使っていて、あと広辞苑を利用している。広辞苑第七版のＥＰＷＩＮ

G版は、まあ出ないんだろうなあ。大辞林と広辞苑とどっちがいいか、研究社の新英和か小学館ランダムハウスか、というのは本当にもう趣味の領域だし、それをあれこれ言っても仕方ない。本気でやるなら、でかい辞書はどれか買え。そんなくらいだ。

ソフトも何か特殊なものを使ってはいない。翻訳そのものは、文字のベタ打ちが基本だ。PDFにするのもEPUBにするのも便利だからMS Wordを使うことは多い。なんだかんだでどうせ本業の開発援助で使わざるを得ないという外的な事情もある。が、変なAI搭載が一時うざくなったしフリーソフト支援の意味でもLibreOfficeも併用してみたりはするが、絶対にこれ、というわけでもない。

発音記号など特殊なニーズがあると、LaTeXを使うことも多い。するとエディタでテキストを打っていくことになるけれど、これも賢いエディタの設定や裏技を紹介できるほど高度な技は使っていない。Emacsのすばらしさを説くとかVSCodeのプラグイン紹介とかをやる手もあるのかもしれない。藤井太洋のnovel-writerプラグインは非常によくて、書き散らかしたたくさんのテキストファイルを何とか一つにまとめようとするときはとても有効でありがたく使っている。が、翻訳はありものを訳していく世界で、構成を考えたり並べ替えをしたりする場面はあまりないので、それほど恩恵はない。

そもそもぼくはツールに凝るのは好きじゃないのだ。Mac ならCotEditor で Windows ならEmEditor、Linux なら gedit で十分。シンプルに文字入力だけに特化してくれるほうがいい。まあ、ＨＴＭＬ書いたり LaTeX 書いたりするときに、タグを自動で閉じてくれたりカラリングしてわかりやすくしてくれたりするのは、確かにありがたい。が、その程度だ。なければＯＳ付属のメモ帳や textedit でもぜんぜんかまわない。ツール依存ではそのツールに何かあったときに身動きが取れなくなる。いざとなれば最低限のものですべてこなせないと。

カナ漢字変換はＡＴＯＫだけれど、しばらく前からだんだん余計な機能が増えてきた。カナ漢字変換で辞書が引ける必要はあるのか、ましてＡＴＯＫで電車の乗り換えを調べようとするヤツが何人いるのか、とは思う。マシンについてくるＩＭＥでも別に生きていけないわけじゃない。ただ単一ソフトに依存しちゃうと競合がなくなって堕落するのが常だから、ＡＴＯＫお布施は払っている。が、値上がりしたし、選択肢を増やす意味でかわせみ4も使っていて、こっちのほうがいいかも、と思うこともある（Mac 以外との連携がねー）。あるいは Google 日本語入力や Mozc でもいい。単語登録ファイルでユーザー辞書を育成すれば、どれも使いものにはなる。そんなものだ。そしてその手の話はかなり属人的

になる。どれが絶対にいいとか悪いとかいう感じではない。

それよりもむしろ、具体的なプロセスをお見せしよう。実際に翻訳をするときに、ぼくが何を考えながら訳しているのかをたどろう。そしてその考えが、翻訳にどう反映されるかを示そう。もちろん、ぼくも何かすごい方法論があるわけではない。基本は、読んで、読んだ通りに訳すだけだ。そして他の人もそうだと思っていた。が、他の人の翻訳と自分の翻訳を比べたときに、やはり自分とは見ているところがちがう、というかぼくが気にしているような部分を、他の人はあまり気にしていないように思う。

それはごく単純な話で、原文の目的意識を読み取り、それに沿った翻訳をする、ということだ。

こう書くと、まったくあたりまえのことだと思う人もいるだろう。翻訳ってそういうものじゃないの？　それをしない翻訳者なんかいるの？　うん。ぼくもそう思っていた。が、そういうことを気にしない翻訳者も多いのかもしれない、と最近レイモンド・チャンドラ

ー『長いお別れ』の四種類の既訳を読んでいて――そしてそれを自分で訳しなおすうちに――思ったのだ。

それでちょっと不安になる面もある。ひょっとしたら、それは本当にどうでもいい部分なのかもしれない。単なる山形だけの変なこだわりなのかもしれない。そしてそう思える部分もある。分野によっては、そんなことをあまり、いやまったく気にする必要もないのだから。むしろ気にしないほうがいいという見方さえある。が、ぼくは気にする。それは気付いてしまえば簡単なことである場合が多いし、それを翻訳に反映させるのも、よっぽどすごい作品でもない限り、そんなにコストはかからないし、それ以上にぼくはそれが重要だと思っているからだ。

ただそれは、何かツールでどうにかなることではない。原文の目的意識を読み取るのが「読む」という行為の大きな一部だ。どうやって最初にそこにたどりつこうか？　というのがおそらくは最大のハードルで……

と言い始めるとすでに本文に入ってしまうけれど、これはそういう本となる。

目次

まえがき 3

1 文芸翻訳へのアプローチ：チャンドラー『長いお別れ』 16

チャンドラー『長いお別れ』を扱う理由 16
初めての印象を大切に：冒頭の一段落 20
原文の目的意識その1と翻訳方針 32
目的意識その2：比喩の使い方 40
おまけ：片岡義男と鴻巣友季子 46

2 翻訳方針その2：フィリップ・マーロウの視線 54

観察できるものだけを描く 54

外面に徹する翻訳方針 60

3 理科系の文学誌 64

科学とエンジニアリングの常識！ 64

常識の文学誌！ 69

常識と探求心 75

文系の文学誌？ 78

それ以外のモノが持つ意味 81

モノからブランドへ？ 84

4 固有名詞、お金、地名 90
ブランド・固有名詞 90
原文のまちがいをどうする？ 94
固有名詞の時代性 97
お金や地名 101

5 目的意識を理解するまで 106
まずは読むことから：意識へのひっかかり 108
意識のひっかかりから翻訳方針へ 111

6 語り口 116
前後の発言・行動で推測できる口調 117

合いの手で推測できる口調 125
状況と人間関係で推測できる口調 133

7 役割語・語り口・呼びかけと代名詞 140
語り口――翻訳が歪めたフィリップ・マーロウ 140
マーロウはどんな人？ 145
呼びかけ 148
人称代名詞 152

8 意図的に意図を隠す：ほのめかし 158
T・S・エリオットをめぐる戦い 158
ストーリーの核心にあるほのめかし――アイリーンとの対決 164
ほのめかしの翻訳 170

わからないとき：わからないことをわかろう 180

9 既訳四つの比較 188

清水俊二訳『長いお別れ』（一九五八） 189
村上春樹訳『ロング・グッドバイ』（二〇〇七） 192
田口俊樹訳『長い別れ』（二〇二二） 197
市川亮平訳『ザ・ロング・グッドバイ』（二〇二三） 200
総評 201

10 『長いお別れ』の特殊性 206

レベルが高すぎる『長いお別れ』 206
文芸翻訳以外では？ 212

11 AIと翻訳 218
AI翻訳までの道のり：翻訳と技術 218
AI翻訳の時代 223
質問相手としてのAI 228
12 翻訳の原点は怒りだ！ ……山形の多くの場合は 234
何を訳そうか？ 234
言語そのものにエンジニアリング的に応える 238
作品愛と翻訳の応えるべきレイヤー 241

おわりに　**翻訳脳の鍛え方？**　248

「読む」とは：意識へのひっかかり　249
意識へのひっかかりを調べて表現する　253
翻訳の意義とその未来：翻訳者の全技術とは　256

あとがき　260

1　文芸翻訳へのアプローチ：チャンドラー『長いお別れ』

チャンドラー『長いお別れ』を扱う理由

では、ぼくがどんなことを考えながら翻訳しているのかを、少し実例を使って見ていこう。そしてここで取り上げるのは文芸翻訳、レイモンド・チャンドラー『長いお別れ』だ。ぼくは二〇二五年にこれをまったくの趣味で全訳したので、それに伴う留意点も記憶に新しいのだ。

なぜ文芸翻訳を取り上げるのか？　それはそちらのほうが面倒だからだ。文芸翻訳は、意味が通ればよいというものではない。もっと細かいところに気を使わなければいけない。何を伝えるかにとどまらず、どう伝えるかにも重点がある。語り口、表現の仕方なんかにも配慮が必要だ。意味を敢えてぼかすための、反語や嫌み、ほのめかしなども多用される。通常の文章の翻訳ならば、意味内容が伝われば九割は合格だ。だが文芸翻訳では、その文章や作家にもよるけれど意味内容が作品で占める比重は七割から九割まで、実に大きな幅

があるし、一部の（よくも悪しくも）変態作家／作品だと表向きの意味内容の比重が半分にも満たない場合すらある。

一方で、意味内容の比重が相対的に小さいのをいいことに、文芸翻訳ではかなりいい加減なやり口がまかりとおることも多い。翻訳が原文の意味内容すらまともに伝えられないほど改変されていても、特にその翻訳者が高名な作家だったりすると、その歪曲（わいきょく）や改変自体がその作家の持ち味ということで許され、むしろ珍重されることも多かった。そこまでいかなくても、表現形式に比べて意味内容の伝達がおろそかにされていたりする。

ぼくは当然ながら、そういうのには顔をしかめる。文体や形式だって、意味内容がきちんと伝わったうえでの話だ。その両者のからみあいがポイントなのだ。

あまりに変態作家だと、翻訳は一般性のない曲芸になるので参考にしづらい。柳瀬尚紀の『フィネガンズ・ウェイク』翻訳小話は楽しいが、それがぼくの翻訳に役立つノウハウかと言われると、そんなわけはない。でもレイモンド・チャンドラーはもっと普通の作家だ。それでありながら、書きぶりに工夫があるため、単に意味を伝えるだけでは翻訳として不十分だ。意味内容とその文体や形式との板挟み、あるいは相乗効果があるため、翻訳としてそれをどう処理するか、という一般性のある説明には好都合だ。『長いお別れ』は、

意味内容と文体のからみあいも示しやすい。ハードボイルド小説として、話の中身と書き方の両方にある程度のパターンがある。両者の対比で、この作品だけが持つ特徴も説明できる。

そしてこの『長いお別れ』は、人気がある小説なので（そして翻訳権がすでに切れているので）、既訳の商業出版が四種類もある。うち三つはすでに評価の確立した翻訳者の手になるものだが、時代も性格もちがう。つまりそれぞれの翻訳方針の差がはっきりしているので、それらと比べることで、ぼくの主張も明確になる。

- **『長いお別れ』（清水俊二訳、一九五八、早川書房）**
- **『ロング・グッドバイ』（村上春樹訳、二〇〇七、早川書房）**
- **『長い別れ』（田口俊樹訳、二〇二二、東京創元社）**
- **『ザ・ロング・グッドバイ』（市川亮平訳、二〇二三、小鳥遊書房）**

それぞれの翻訳の詳細はこれから見るけれど、一般的なイメージをざっと述べておこう。清水俊二は、映画の字幕翻訳でも有名だ。簡潔に、時には大胆に省略して意味を伝えねば

ならない字幕の流儀を持ち込んだ彼の翻訳は、その力強い歯切れのよさのおかげで、長年にわたりチャンドラー翻訳の定番だった。さすがに古びた部分はあるし、あちこち省略しているのが難点とされてきたが、半世紀以上たっても十分に通用するものとなっている。

あの天下の村上春樹による訳は、大きな影響を受けた作家・作品として彼が自ら早川書房に直談判し、翻訳出版させたもの。それだけの思い入れを反映させた、村上春樹ならではの文学的な翻訳になっているはず、というのが一般的な期待だろう。

それに対し、田口俊樹はミステリー翻訳の大家で、作家性を前面に出した村上春樹に比べて非常に堅実な、裏方に徹した職人的翻訳をしてくれるだろう、というのが普通の期待だ。

市川亮平訳は、成立事情がはっきりしないが、訳者個人の思い入れがとても強いものだというのは明らかだ。

たぶんそれに対し、山形は何やら我の強い訳者と思われているらしい。ぼくはそれが不当だと思う。ぼくは多くの人とはけたちがいに原文に忠実なだけのつもりだ。本書ではそれを示せるものと期待したいのだけれど……

では取りかかろう。

次世代による次世代のための

武器としての教養
星海社新書

星海社新書は、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて、ここに創刊いたします。本の力を思いきり信じて、**みなさんと一緒に新しい時代の新しい価値観を創っていきたい。若い力で、世界を変えていきたいのです。**

本には、その力があります。読者であるあなたが、そこから何かを読み取り、それを自らの血肉にすることができれば、一冊の本の存在によって、あなたの人生は一瞬にして変わってしまうでしょう。**思考が変われば行動が変わり、行動が変われば生き方が変わります。**著者をはじめ、本作りに関わる多くの人の想いがそのまま形となった、文化的遺伝子としての本には、大げさではなく、それだけの力が宿っていると思うのです。

沈下していく地盤の上で、他のみんなと一緒に身動きが取れないまま、大きな穴へと落ちていくのか？　それとも、重力に逆らって立ち上がり、前を向いて最前線で戦っていくことを選ぶのか？

星海社新書の目的は、**戦うことを選んだ次世代の仲間たちに「武器としての教養」をくばることです。**知的好奇心を満たすだけでなく、自らの力で未来を切り開いていくための〝武器〟としても使える知のかたちを、シリーズとしてまとめていきたいと思います。

2011年9月

星海社新書初代編集長　柿内芳文

SEIKAISHA
SHINSHO